

『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「変貌するコミュニケーションと社会言語科学I：インクルーシブな社会の実現を目指したダイバーシティ研究」の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

特集では最終投稿期限が設定されていますが、投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入りますので、より早く投稿された論文ほど査読が早く進みます。なお、刊行時期までに採択とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2024年9月30日(月)

掲載号の発行：2025年9月（第28巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください（HPの「学会誌」ページ参照）

変貌するコミュニケーションと社会言語科学I：

インクルーシブな社会の実現を目指したダイバーシティ研究

担当エディター：朝日 祥之（国立国語研究所）

小川 一美（愛知淑徳大学）

高木 智世（筑波大学）

高丸 圭一（宇都宮共和大学）

寅丸 真澄（早稲田大学）

南部 智史（モナシュ大学）

村岡 貴子（大阪大学）

本学会が創立されてから四半世紀が経過した。初代会長の徳川宗賢氏は、本学会設立の目的として、人類社会、とりわけ言語またはコミュニケーションを人間・社会・文化との関わりにおいて調査研究し、そこに内在する言語問題を幅広く取り上げ、その解決を志向していくことを掲げた。

本特集号は、この四半世紀に言語とコミュニケーションに生じた変容を取り上げる。この間に生じた社会の変容は、さらなる国際化、情報化、そして、サステナビリティ実現のための活動実践などに代表されよう。これらを言語とコミュニケーションに関連させると、例えば、人の移動による新たな言語接触、多言語主義や複言語主義、言語権、インターネットやスマートフォンなどの新たな通信環境、通信手段の発達、SNSや電子メールなどのコミュニケーションの普及、また、マイノリティに関わる諸問題を再評価することによるダイバーシティへの関心の高まり、医療福祉や行政分野における専門家と非専門家との言語コミュニケーションに見られる問題など、実にさまざまである。

これらの今日的課題に関する検討を特集号エディターで行った結果、本特集号のテーマを「変貌するコミュニケーションと社会言語科学」とすることとした。このテーマは、多くの研究分野、研究方法に関わるもので、本学会の強みを活かしたものである。四半世紀における本学会の歴史の中でさまざまな研究分野の学会員による学際的研究により培われてきた領域を「変貌するコミュニケーションと社会言語科学」という共通の特集号テーマとして捉える。具体的には次に述べる二つのトピックを2つの巻（28巻、29巻）の特集号として設定し、論文投稿を呼びかけることとした。

この二つのトピックは、「インクルーシブな社会の実現を目指したダイバーシティ研究」（28巻）と「メディ

アとコミュニケーションの変容に関する研究」(29巻)である。本特集号のテーマで取り上げる二つのトピックは、多様化・情報化の進む社会を代表するものであるという点で共通している。これに加え、いずれのトピックもこの四半世紀の間にそのあり方、普及の仕方に大きな変化が生じたものである。その変化によって生じた言語とコミュニケーションへの影響は少なくない。もちろん両者が相互に作用してきている部分があるのも事実である。以下、本巻での特集号のトピックである「インクルーシブな社会の実現を目指したダイバーシティ研究」について説明する。

「インクルーシブな社会の実現を目指したダイバーシティ研究」は、この四半世紀における私たちの社会の生活で大きくそれに対する意識が変わったテーマである。無論、日本社会をはじめとした世界各地の社会自体が本来的に多様であったわけだが、近年、この多様性の(再)認識がなされることにより、さまざまな文化や価値観が共生する社会を志向するようになった。これを象徴する出来事が2015年に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ(以下、SDGs)」である。SDGsによるサステナブルな社会の実現に向けた17の目標が掲げられ、その実現に向けた活動が世界規模で行われている。これにより、それまでの日本社会では十分に組み込まれてこなかったマイノリティへ理解、再評価がなされるようになった。この特集号では、例えば、ダイバーシティを支える現場(制度的な場としての職場、学校、医療、行政、介護現場)や日常生活の場(地域、コミュニティ等)や、その言説を扱ったもの、ジェンダーやLGBTQ+, ろう者、盲者、盲ろう者、外国人、高齢者、年少者のコミュニケーション、自然災害や有事のコミュニケーション、公共空間のコミュニケーション、バーチャルコミュニケーションなど、さまざまな研究課題が想定される。インクルーシブな社会の実現のために、そこで実践されるコミュニケーションとそこに内在する言語、社会、心理、教育等に関わる課題を論じた論文を期待したい。

なお、次回の特集号(29巻)で扱う「メディア」は、本号で扱う「ダイバーシティ」と相互に関係していることは言うまでもない。例えば、オンライン会議システムや非接触決済システムなどに使用される「メディア」に関する論考自体は、次号でその投稿の対象となるが、例えば、インクルーシブなコミュニケーションのあり方を考察する研究論文であれば、本号での論文投稿も積極的に検討していただきたい。

本特集号は、本学会が設立されてからの四半世紀に生じた言語とコミュニケーションの変貌の実態に迫るものである。徳川宗賢氏が学会設立時にその必要性を説いた通り、既存の学問領域を超えた研究を実践することで、学問の地平を拓いたかどうかを世に問いたい。この設立趣旨に賛同する多くの会員からの投稿により、「社会言語科学」の実践を具現化したいとエディター一同願うばかりである。